

第四十四回 .. 忍びがたきを忍び...

文：田中啓文

あけましておめでとうございます。本年もラクゴ・ザ・フューチャーをよろしくお願いします。それにしても今回で連載44回目。一回最低10枚というしりだから、少なくとも440枚は書いているわけだ。多いときと1回分が40枚近くもあつたので、実際は500枚を超えていることはまちがいない。じゅうぶん一冊にはなっているではないか。

どこかこのエッセイを出版しようという勇気のある出版社はないものか。ないわなあ。出版社でなくてもパン屋でも豆腐屋でも会計事務所でもいいのだが、どこか本にしてくれませんか。くれんなあ。そういえば、e-NOVELSというサイトで連載していたエッセイ「あいうえ音座録」ちりぬる音座録」がこのたびめでたく完結したが、これも全部で100回ぐらいあり、じゅうぶん一冊にはなる。どこかこのエッセイを出版しようという勇気のある出版社はないものか。ないわなあ。出版社でなくてもうどん屋でも仏壇屋でも測量事務所でもいいのだが、どこか本にしてくれませんか。くれんなあ。しかし、性懲りもなくこのラクゴ・ザ・フューチャーは今年も続くのである。

というわけで、新年早々不景気な話になったが、たしかに今年是不景気である。これを誰かのせいにしてしまうのは簡単である。政治が悪い。国が悪い。首相が悪い。財務担当大臣が悪い。会社が悪い。社長が悪い。テロリストが悪い。金融・証券が悪い。日銀が悪い。しかし、本当に悪いものは他

にいるのである。すなわち……景気が悪いのだ。

というわけで今回もはじまるラクゴ・ザ・フューチャーでございます。

「じんべはん、こんにちは」

「お、誰やと思たら、おまはんかいな。ま、こっちあがり」

「あがらせてもらいます。とっつ！」

「ななななんや、急に掛け声かけて、飛びあがるやなんてびつくりするやないか」

「これぞ忍法飛びあがりの術」

「なんやねん、それ」

「わて、こないだから忍術習てまんねん。横まちに『御忍術指南所』ゆう看板があがったんで行ってみたら、月謝安かったもんで入門しましてん」

「ふーん、忍術なあ。今時やないと思うがなあ」

「何ゆつてまんねん。最近アメリカではニンジャがえらい流行ってるゆう話でっせ。ニンジャートルズとか」

「最近で、とっつい昔やないか、そんなもん。ほんで、おまえのは何忍者や」

「何忍者で……どうゆうことです」

「わからんか。甲賀忍者とか風魔忍者とかあるやろ」

「さあ……きいてまへんなあ」

「先生は何ちゆう名前や」

「ガチンコ爺、ゆつてはりましたけど」

「それもゆうなら、果心居士やろ。豊臣時代の幻術使いの名前やが、快傑ライオン丸にも出てくる。本名やないやろ」

「本名は、大猿大助とかゆつてましたわ」

「サスケのお父さんやがな。その人、どんな格好してる？」

「忍者は変装が大事ゆつて、いろんな格好してはりますわ。」

こないだは、全身に針みたいなたゲみたいなたゲを付けて栗

みたいな扮装してはりましたで」

「ただのコスプレファンとちゃうやろな。あ、わかった……それはイガ忍者や」

「三角形の白いぐにやぐにやの服着て、吸盤のついた長い脚をぶらさげてはったことありましたで」

「もしかしたら烏賊忍者やかもしれんな」

「気持ち悪いぐちゃぐちゃっとした皺みみたいなもんがびっしりついた、生ホルモンみたいな服を着てたこともおまつせ」
 「もしかしたら襷忍者かもな。ま、どうでもええわ。で、どんなことを習てんねん」

「そうでんなあ……まず、歌ですわ」

「ああ、なるほど。忍者の心得を三十一文字の歌にしてある、いわゆる忍び和歌ゆうやつやな」

「ちやいますちやいます。歌謡曲ですわ」

「はあ？ どんな曲や」

「たとえば、『昔の名前で出ています』とか。京都にいるときや、忍びと呼ばれたの」

「その忍術教室、やめたほうがええんとちゃうか。他にはどんな歌や」

「えーとね……忍びがとおる獣道」

「おまえな、習うんやつたらちゃんと習てこい。獣道は獣道と読むんとちゃうで。獣道と読むねん」

「あつ、そうですのん。知らんかったなあ。わて、ずっと、獣道とやとばかり思てました。獣道でしたんか。でも、これ、ルビなしで読んだらなんのことかわかりまへんやろな」
 「そこまで考えんでええやろ」

「獣道ゆうのは、何のことですねん」

「おまえ、知らんと歌てたんか。山のなかにある、鹿とか猪とかが勝手につけた道のこつちゃ」

「はあー、それやったらさぞくねくねと曲がりくねってまねやろ」

「それがそうやない。獣道は昔からまっすぐと決まってるな。獣道一直線ゆつやろ」

「ルビないとわからんのとちやいまつか」

「そこまで考えんでええやろ。ところで、今の歌は『忍風力ムイ外伝』の主題歌やな。ええなあ、白土三平」

「『サスケ』とか『ワタリ』ゆうのもおましたな。『ワタリ』の歌でどんなんでした？」

「知らんのか。いろいろあるけどな、一番ヒットしたんは『くちなしの花』やろな」

「それは渡哲也でんがな」

「ちがうんかい。さつき小林旭が出たからてつきり……」

「あほなこと言いなはん」

「歌のほかには何を習てんねん」

「いろんな道具の使い方ですわ」

「忍び道具ゆうやつやな。どんな道具や」

「クイナゆうやつ知ってまつか」

「ああ、沖縄における新種の鳥やろ。大きな翼を持つてるのに飛ばれへんらしいな」

「なんでんねん、それ」

「ヤンバルクイナやろ」

「ちやいまんがな。クイナ……ちやうちやう、クナイでしたわ」

「ああ、土を掘るスコップみたいな道具か」

「マキビシゆうのも習いましたけど、あれはなかなか難しおまん。何遍も先生に叱られました」

「まー、厳しい」

「しょうもない洒落言いはんな」

「あほ。それがわしらの仕事やがな」

「手裏剣もちよつとだけやりましたで。あの、八方手裏剣ゆつやつ」

「ああ、こないだえらいもめとつたな。税金を上げるとか上げへんとかゆつて」

「何のことでんねん」

「不景気やねんから、安いビールぐらい気い良う飲ませてほしいもんやな。国民から税金しぼりとることしか考えとらんのや、あいつらは」

「それは、発泡酒の利権ですやろ。あと、忍刀（にんとう）ゆつて、忍者独特の刀の使い方も習いましたで」

「背中に背負えるように短つて、下げ緒が長つて、鰐が大きいやつやな」

「じんべはん、えらい詳しおまん」

「わしは忍者にはちよつとづるさいで。忍刀はいろいろ使えて便利なそつやな」

「そうでんねん。下げ緒は敵をしばるときにも使えますし、堀に立てかけて、鰐を足がかりにしてジャンプするのにも使えまつせ」

「わしの聞いた話では、火事を消すのにも使えるらしいな」

「はあ……わてはそんな聞いてまへんけど」

「燃えてる火のなかに忍刀を放り込んだら、刀は燃えてなくなるかわりに火がすーっと冷とうなるらしいわ。忍刀滅却すれば火もまた涼し、ちゅうやつやな」

「洒落ですかいな」

「忍刀は一本しか持ったらあかんことに決まったあるらしいで」

「へー、知りまへんでした。なんででんねん」

「昔からよう言うやろ。忍者の一刀で」

「へ？」

「昔からよう言うやろ。忍者の一刀で」

「へ？」

「昔からよう言うやろ。忍者の一刀で」

「へ？」

「わからんか、おまえ。貧者の一灯の洒落やがな」

「そんなことわざ知らんわ。もつとわかりやすうせんと読者が離れまっせ」

「もうじゅうぶん離れとるわ」

「でっしやるな……」

「いろいろ術も習たんか？」

「術ちゅうと？」

「ようあるやつちゃ。おぼろ影とか、ミジン隠れ、木の葉隠れ、タヌキ隠れ、キツネ隠れ……あと、スイトンの術とかカトンの術とか」

「どれも習いましたで。カトンの術はわたの十八番ですわ」

「ほう、すごいやないか。あれはごっつい派手な術やからな」

「そうでつか？ けっこう地味でしたで」

「おまえが習たカトンの術でどんなんや」

「カヤクを使いまんねん」

「そや、カヤクを使う」

「火も使いますわな」

「そらそやろ」

「あと、鍋と出汁もいりますわな」

「そや、鍋と出汁と……ちよつと待て。おまえ何の話してるねん」
「しゃあからカトンの術でんがな。鍋にたっぷりの湯を沸かして、うどんを放り込みますわな。ちよつと芯があるぐらいに茹であげて、水切りをして、流水で水洗いをします。どろぶりに入れて、別に作って温めといた出汁をかけまして、上に葱とか蒲鉾とかのカヤクを載せてできあがり」

「それ、何やねん」

「カトンの術」

「カケウドンの術とちやうか」

「そうでしたかいな。スイトンの術ゆうのは、同じように
どんぶりに熱々の出汁をはりまして、そこに小麦粉で作った
団子を入れまんねん」

「おぼろ影ちゆうのは……」

「おぼろ影ちやいまっせ、おぼろアゲ。どんぶりにうどんと
熱々の出汁を入れて、上からおぼろ昆布と細切りのアゲをば
らばらっとかけまんねん」

「ミジン隠れは」

「どんぶりにうどんと熱々の出汁を入れて、上からうどんが
見えへんぐらいに葱のミジン切りをかけまんねん」

「木の葉隠れは」

「どんぶりにうどんと熱々の出汁を入れて、上からうどんが
見えへんぐらいに蒲鉾としいたけを甘う煮たやつをかけて、
卵でとじまんねん」

「タヌキ隠れは」

「タヌキ隠れちやいまっせ。サヌキ隠れ。うどんにサヌキう
どんを使いまんねん」

「キツネ隠れは……だいたいもうわかったから言わんでもえ
えわ」

「そら残念ですなあ。でも、先生が一番難しいのはざるうどん
やて言つてはりました」

「あのな……おまえの習てるのはもしかしたら麺類の作り方
とちやうか」

「もしかせんでもそうですわ。大猿大助先生はもともとうどん
やですねん」

「なるほど、大猿だけに、ざるうどんが得意なんやな」

わあわあ言うております。おなじみの「忍術根問」半ばで失礼いたします。

(了)